

---

# 剥ぎ取り

マシュー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
剥ぎ取り

【Nコード】  
N8689M

【作者名】  
マシュー

【あらすじ】  
盾蟹、剥ぎ取り、狩猟笛、若者、砂漠、感謝。

実力派ハンターとして名高い彼は、まだ若かった。

愛用の黒い狩猟笛を背に負い、ひと息つくと、力なくうつ伏せる盾蟹　ダイミヨウザミの剥ぎ取りにかかった。

無数の傷跡が刻まれた大きな鋏に、慎重に刃を立て滑らせる。

何万回と繰り返してきた作業なのに、いくらやっても慣れるということはない。

堅く鋭いその鋏の付け根を外し本体から引きちぎり、掌を這すと、まだ仄かに温かく、ずっしりと重い。

指先に痛みが走り、血が滴った。

落ちた血の雫は盾蟹の脚を滑り、砂漠の熱された砂に蒸発した。

次に彼は、力なく投げ出された脚の解体に取りかかった。持つのも難しいほど重く、そして鋭い。

こめかみや首筋から汗が幾筋も伝い、彼自慢の、主に森丘を縄張りとする、蒼い飛竜由来の腕用防具を滑った。

「とれた……」

無口な彼が珍しく安堵の表情を浮かべた。

かなりの重量があるその脚を、彼は慎重にポーチにしまった。

ずさんに扱うと、また怪我をしかねないと、血のしたたる指先を舐めつつ思った。

ヤドを外し、堅い外殻を削る。たくさんはいらない。必要最小限だけ、あればいい。

彼は腕に力を込め、一気に引き抜いた。かぼんと間抜けな音がし、つるつるした堅殻が彼の手に収まった。

強度とは裏腹にとっても軽いそれを、彼は掌で撫で、言った。

「…ありがとう」

盾蟹の亡骸に頭を下げ、彼は、拠点としている村に帰るべく、歩きだした。

（後書き）

以前「剥ぎ取り」というテーマで書いたものをリメイク

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8689m/>

---

剥ぎ取り

2010年10月28日08時55分発行